

小学校総合学習での「繭から糸づくり」についての実践

多摩シルクライフ21研究会

新井いせ子 岡本昇子 境 京子 須田しづ 難波多美子 ○小此木エツ子

まえがき

蚕糸・絹業は、日本の象徴産業であると云われている。その由来は、蚕糸・絹業が我が国の温暖な気候、風土と国民性（自然に対する独特な感受性と、正確・緻密・繊細な国民性）に叶った産業だからであろう。

我が国の蚕糸・絹業は、長い歴史の中で、外国の技術を導入しながらも、我が国独自の多様な衣文化をつくり上げて来た。イギリスはウールによって、インドは綿によって、それぞれが象徴されるように、日本は絹によって、その国民性が象徴されて来たのである。

従って、この先どのような状況に置かれようとも、蚕糸・絹業は大切に育成して行かなければいけないと考えている。

以上のような観点から、当研究会では発足以来、養蚕、製糸、染織、そして最終製品に至るまで、日本の風土に根ざした技術の組み立てを重視する物づくりに取り組んで現在に至っている。加えて、長い伝統を継承すると共にその技術の普及にも務めて来たが、最近、その技術普及の一環として、新指導要項に基づく小学校の「総合学習」の中での、「蚕の飼い方」「繭からの糸づくり」についての教室に参加するなど、小学校で行なわれる蚕糸に関わる体験学習に参加している。

ところで、その総合学習について文部科学省は、教育改革の一環として、今春から教科の枠にとらわれない総合的な学習を盛り込んだ新学習指導要項の実施に踏み切った。小中高校の学校現場では、この総合学習の実施が、学習面でプラスになるかマイナスになるか、見解が分かれているようであるが、小学校児童を対象とした場合は、今の子供たちを取り巻く環境が変わり、子供達の周辺ではすべての面で「生産」と「消費」が完全に分離し、子供達の目には益々「生産」の現場が見えにくくなってしまっているのが実情である。そこで総合学習の実施に、仮に多少のマイナス面があるとしても、前述のような実情から、発達段階の子供達にとって、総合学習が重要な学習となることは間違いないのではないかと思われる。

当研究会が行なった小学校児童を対象とした総合学習の概要

従来、蚕は「昆虫の生態」を学ぶ上で身近で、一番取り扱い易い昆虫であることから、小学校3、4年生の理科教材として広く取り上げられて来たが、最近、繭づくりから後の、糸づくり、作品づくりにも取り組んで見たいという要望が増えて来つつあるので、その対応策として、次のようなことを行なった。

(1)実態調査

当研究会では、東京都農業試験場が平成11年より約130校の小中学校を対象に行なって来た理科教材としての蚕種配布を引継いで、現在160校になっているが、今春、これらの配布校に対して、蚕を飼育する狙い等学習の実態についてアンケート調査を行なったところ、多くの学校から回答と要望が寄せられた。

（回答と要望についての以下の報告は、紙面の都合でかなり割愛しましたので、その点お断りします。）

①蚕を飼育する狙い

1. 昆虫の生態を調べる
2. 生命の神秘、生命を尊重する意義を学ぶ
3. 生物環境と自然とのかかわりを学ぶ
4. 地域産業を体験する
5. 八王子市の歴史を学ぶ
6. 昔人の知恵、農民の生活を学ぶ
7. 物を大切に作る心を学ぶ
8. 生物の世話の仕方を学ぶ
9. 物づくりを体験する
10. 子供たちに地域伝統文化に関心を持たせる
11. ふるさと意識を高める
12. 国際交流のなかでの日本文化を考

える 13.地域社会を学ぶ 14.繊維素材となる蚕・繭を知る

②蚕を飼育する授業科目

- 1.総合学習 2.理科 3.社会科 4.生活科

③参考になっている教材

- 1.著書（蚕の卵） 2.その他蚕関係の著書13種

④今までに一番困ったこと

桑不足・桑の確保、その他15項目

⑤この教室で学びたいこと

- 1.蚕の手軽な利用法、有効な使い道
2.糸づくり・真綿づくりとその利用法、その他16項目



或る小学校の総合学習風景1

(2)蚕の飼い方と繭から糸をつくる学習教室の開催

学習の内容

①蚕の飼い方

- 1.自然と昆虫 2.昆虫の特徴 3.蚕の一生
4.蚕の飼い方 5.蚕の観察 6.桑園管理
7.催青・孵化法（掃立日調節） 8.蚕の病気

②繭から糸をつくる

- 1.繭を精練して真綿をつくり、そして糸をつむぐ 2.繭を精練してぶり出して糸をつむぐ
3.繭を煮繭し、糸を繰って生糸をつくる 4.つくった糸で織り方の基本を学ぶ
5.シルクスルー、マフラー等の作品をつくる



同校の総合学習風景2

まとめ

「蚕に関わる実習」を総合学習科目として実践して考えられることは、小学校低学年では、蚕が人間の衣生活に深く関わっていることを理解させるに留まり、それ以上のことを理解させることは難しい。

しかし、低学年児童のこのような学習による体験が、小学高学年から中学校、高校へと成長するその後の段階で、地域の文化や産業の歴史観等に発展させて行ければ、それでいいのではないかと考える。

次に、「繭から糸をつくる」という学習は、繭の精練、煮繭、繰糸のいずれをとってみても、低学年児童にとっては技術的にみて難しいことがあげられる。

一方で、絹は天然繊維であるので、糸づくり真綿づくりの過程が変化に富んでいて、面白いらしく、大きな歓声を上げながら取り組んでいる低学年児童の姿を見ていると、上記のような難題も早くクリアして、比較的難しいことでも、低学年児童に出来るだけ分かり易い内容に改めなければならないと強く感じている。

加えて、蚕の飼育から糸や作品をつくる学習は、緻密な観察力や集中力を養う学習として、適切であると云えるものであり、この点について、小学校の教師から、学習後の児童の変容について、幾つかの報告が届いている。

小学校の総合学習が今後どのような形で定着して行くかは未知数であるが、当研究会では、蚕の飼育から始まる総括的学習を総合学習として取り入れる小学校にはこれからも協力を惜みず、学習の推移を見守って行きたい。